

青い炎

糸永知子

不識書院

青い炎

一九八六年一〇月一五日発行

著者——糸永知子

埼玉県秩父市大字黒谷七九五―二 丁368

発行者——中静 勇

発行所——不識書院

東京都千代田区神田小川町三―二 丁101

電話 東京二九二―九一〇三 振替 東京五―一九〇九九五
印刷——錦明印刷 製本——牧製本

定価——二五〇〇円

© Tomoko Itonaga 1986

序
文

—
近
藤
芳
美

糸永知子さんのふるさは山陰の、島根県簸川郡、鰐淵村とかつていったところという。島根半島の、ちょうど出雲大社の背後のような地であり、鰐淵鉱業所という石膏の採掘所があった。彼女は国民学校を卒業した後その鉱業所に働き、やがて今の夫である人に出会われた。家計が傾き、父は大工をし、母は蚕を飼ひ畑を耕して暮したというが、そうした幼時追憶はかすかな影のように歌集一冊の各所に散見しよう。ひとりの叔父がいて戦死した。「暁部隊」といい、それはかつてわたしも兵として所属した船舶兵という敵前上陸部隊のことである。彼女の少女期も、また青春も日本の戦争と戦後の暗く貧しい歴史の一時代の上にあった。

結婚した夫と共に各地の鉱業所を住み移り、昭和三九年のころから秩父に居を構える。一男一女が成人した。昭和四三年のころ、朝日新聞埼玉版に投稿したのが短歌を作るきっかけというから、必ずしも早い出発とはいえない。昭和五二年にわたしたちの『未来』に参加された。その前に一時、大野誠夫君の『作風』に所属された時期があったという。

そうであればわたしは糸永さんの短歌をすでに十年近く、『未来』へ提出する月々の作品を通して見て来たこととなる。それは初めから一定の技術的完成の上に、淡く、物静かであり、彼女自身の生きた人生と生活身辺の範囲をつましくうたい繰り返しながら、つねにその内面のものを告げ伝えていたと思う。糸永さんはそうしたみずからの作品を歌集とすることを決意され、歌集稿ともいうべきものを作成された。わたしもまた、求められた序文執筆のためにそれを拝見した。選歌としてそれぞれ一度は読んだものかもしれないが、一歌集として通読することには別の意味を持つ。

読みながら、作品を終始流れている、沈んだ抒情ともいえるものを改めて感じた。或いはそのことが、彼女の遠い出生自体から来ているのではないかなどとも思ってみたりした。わたしは彼女のふるさとである島根半島の、暗い藍色の日本海の沖のひろがりとその大気とを知らないわけではない。序文の最初にやや糸永さんの幼年期に触れておいたのはそうしたためもある。

この新しい歌集がきつと心の深い、よい一冊となるであろうと思って紹介の

筆を執った。彼女自身の作風自体のゆえに、決して世評を浴びるといった華やかなものになるはずはないが、詩といい、抒情といい、本来、岩かげに湧く泉のようにかそかであり清らかであることを知る読者にとり、必ず共感として読まれるのを信じ、今またひとりの短歌作者をわたしたちの周辺から広い世界に送り出したい。

一九八六年七月、梅雨の終わろうとする日、記す。

青
い
炎

目
次

あかざの芽

この年の花

風吹く

めぐる八月

波の牙

元旦

秩父の大寒

夢に点す

髪梳く

嫁ぐ子

菫の芽

3

5

7

9

13

15

17

19

21

23

27

うごかぬ時計	29
あらくさの実	31
猫の仔	34
樺	37
人の祝ぎごと	39
叔父	41
子の就職	43
今年の柿	44
母	46
おとろえ	48
わさびの花	50

ひこばえの桐

芳美の声

少女

叔父の死

寒の銀杏

ペダルを踏む

犬を抱く少女

故里

それぞれに帰る

心澄む

まつり

74 72 70 67 64 62 60 58 56 55 52

花粉

風さやる

笑うことなし

枯れしひるがお

出雲

カーテンを引く

峡の短日

夫のセーター

老いし父

供華

夫の病い

76

77

80

83

85

87

89

91

93

95

97

風生るる

ゴキブリ

蟋蟀

秋の陽降る

ほとけと遊ぶ

人に疲るる

窓あけ放つ

子を祀る

ピッコロの音

父の死

生きる

125 121 119 116 114 112 108 106 104 102 100

こころ和らぐ

早春

羊歯の芽

茎立ちあがる

梅雨明け

猿

夏のおわり

年々の風

幼き者へ

あとがき

147

143

141

139

137

135

133

131

129

127

青 い 炎

あかざの芽

朝よりの細かき雨は山鳩の巢作る庭の檜葉を
濡らせる

ふるさとの父は気弱くなりしとの文来ぬ出雲
はいま遠くして